

草庵仏教

第122号
(発行日)
2000年8月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
(8月は休み)
- * 聖典講座(浜屋西宮店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

山やりの夜話

E 「病気のため、体のあちこちの具合が悪く、体が不自由で思うようになりません」
D 「体が不自由だと大変でしょうね」
E 「ええ、自分の体でありながら、自分の自由になりませんから、ついイライラしたり、主人にきつく当たったりします」
D 「思い通りにならない自分なさない自分に腹が立つのですね。そうなるについつい周りの人に当たったりするんじゃないでしょうか」
E 「ええそうです。周りの人は自由に出かけたり旅行に行ったりしてののに、どうして自分だけこんな目にあわねばならないのかと、嘆かわしくなりますね」
D 「無理もないですね」
E 「こんな病身になったのは自分の業が深いからだと思えます」
D 「自分の宿業でこんな目にあうのだというのですね」
E 「ええ、そう感じるのです」
D 「あなたの過去の罪業(宿業)の報いが現在の病気の身として現れているということですか」
E 「ええ、そう感じるのですが、間違ってますか」
D 「厄介な病気が過去のあなたの悪業の報いかどうか、その因果関係は私には分かりません。仏教では、病は過去の罪悪が原因であるとはいえない

せん。しかし、病身の体を縁として自分の過去の罪の深さが感じられるのは、よく分かります。私も病気の時は時々そのように感じます。宿業は理屈ではなく、宿業感として感じられてくるものですから。いろいろな苦しみを縁として、自分の罪の深さを感じることには、私には自然な道理だと思えます。なぜこんな体になったのかと嘆くことだけから、それを縁として自分の宿業の深さをじつと見つめる、それは意味のあることだと思えます」
E 「この体の苦痛が自分を知らせてくれるのですね」
D 「そういう縁にはなつてくれませんが、ただ注意しなくてはならないことは、宿業は宿業感であつて、あくまで自分に感じるものです。他の病人を見て、あの人は業が深いから病気になるのだからと受け取るなら、それは宿業感ではありませんし、間違っています」
E 「仏教で言う(業が深い)身というのは、あくまで自分自身に感じて、他者を(罪の深い奴だ)と裁くものではないのですか」
D 「ええそうです。大体仏教の教えは全体が内観的です。例えば仏教で言う(無常)というところで、単なる客観的自然が変化きわまりないこと

を説明するのが目的の言葉ではなく、我が世・我が人生・我が身・我が心の危うさ・はかなさ・頼りなさを自分自身に内省せしめる教えの言葉です」
E 「無常は、我がいのちの頼りなさを教える言葉ということですが、病気になる、苦しんでみて、頼りにならぬ身体を頼りにしてきたことをつくづく感じていきます」
D 「当てにならないと知りながらいつの間にかあて頼りにしているのが私たちで、何か事が起こると、今さらながら頼みにもならぬものを頼みにしていたことが痛感されます。凡夫は壁にぶつかり痛い目にあわないと了解ができないのでしようかね。駿馬はムチでたたかれなくても走り出すが、驚馬は強くむち打たれてやつと動き出すようなもので、凡夫は愚鈍なのです」
E 「自分は歩くのさえままならないのに、周りの人は自由に動けるのを見ると、羨ましくなるし、自分がなさげなくなります」
D 「周りの人と自分を比べるのですか」
E 「そうですね、人と比べるからやりきれなくなるのですからね」
D 「ええ、比較する心です。大体、煩惱というのは比較する心といっているんです」
E 「他と比べる心で苦しんでいるのですか」
D 「ええ、自分の心や思いによつて、苦しんだりたぶらかされるのです」
E 「そうですね。自分の心に

【孟蘭盆会法要】
8月15日(火)
午後2時より
* 8月22日の同朋会は休みます。

たぶらかされる私だということ、本当にそうですね。庭の枯れた木を見てみると、枯れているのにもかかわらず、そういう事実を受けとめて存在しているように思つて感動します。他と比較しないのです」
D 「人間以外の物は、自分を他と比べることはなく、与えられた自分の事実(分限)を自ずから引き受けているのです。だからそれを見るときに少し安らぐのだと思います」
E 「そういえば、(身の事実)に帰る」とか(身の事実)に立つ」とか、よく聞きますね」
D 「身の事実に戻るとは、私の状況がどんなに惨めな現実でも、これを我が身の逃げもかくれも出来ない唯一の今の事実であると受けとめ、受け入れることだと思います。実際は、自分の思いではたへん辛いことであつても、すでに身はちゃんと受け取つているのです。さっきの枯れた木が枯れている事実をちゃんと受け取つて存在しているように」

真宗聖典講座

念
仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんと
ならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、
魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感
ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえ
に、無碍の一道なりと云々 (歎異鈔第七章)

〈歎異鈔第七章第三講〉

今回は「魔界外道も障碍することなし」を讀んでみたいと思います。

魔というのは、目には見えませんが人間を不幸におとしめたり、苦しい目にあわせたり、善をさせないで悪に引き込んだりするものでしょう。魔界ですからそういうものの集団なり世界をいうのでしょう。外道というのは、本来は仏教とは異なる宗教とか道とか、仏法とは異なった思想や哲学をいうのですが、普通は、仏道をさまたげるあやまった思想や信仰のことであり、ここでは魔界と同じく、人をまどわせ悩ませるものというほどの意味でしょう。

魔には内魔と外魔があり、内魔は煩惱のことです。煩惱は悟りを妨げ、人間を悩ませたり苦しめたりし、悪行へとおもむかせるからです。しかし、歎異鈔のこの部分では外魔のことが主ではないかと思えます。外魔が本当に外界に存在するものかどうか。現代でも「存在する」という人も結構います。私自身は仏教の教えに従って、悪魔や鬼神などが実体的に存在するとは思っていません。けれども、存在すると思つて怖れている人が現代でも多いのは事実ですから、ここでは仮に存在しているとして、それらが、人間の幸せや悟りへの道を妨害し、不幸や悪道に引張り込もうとしていると、こう讀んでおきます。

電灯もない中世の時代へタイムスリップしたとし

ましよう。電灯もなく、ロソクや油の灯火でほかに明るい以外は、真つ暗闇な夜の世界にいると、悪魔だの鬼だの怨霊だの妖怪だのキツネだの狸だのというものが、私たちの隙をねらつて、私たちを不幸におとしめようとしている、というような恐怖を多くの人びとがもつたとしても決して不思議ではありません。夜の闇は不気味なものです。

私たちのように自然科学の一端を学んでおればまだしも、分からないものだらけの真ん中に生き、疫病や飢饉や洪水などの明日をも知れぬ厳しい環境に取り囲まれているとしたら、そこに目に見えない魔界というものを感じ、恐れを感じて生きる人たちが、いぶんいたのではないのでしょうか。

今でも、何か悪霊にとりつかれそうだというので、墓場に行くのは怖いと言う人もいます。怨霊や死霊や動物霊などのタタリだと言つて怖れている人は、いぶんいます。もっと身近には「先祖の法事や供養をしないと先祖のタタリや罰が当たる」という恐れから仏事をしていない人たちがいます。玄関にお札を張つて悪魔が入らないようにしたりするのも同じ恐れです。人は、昔も今も、目に見えぬもの(魔)を恐れ、怯えているのです。

人間の歴史は一面、こうした目に見えない魔物、魔界を恐れ続けてきた歴史でもあります。多くの宗教施設はこうした魔のタタリや罰が来ないように鎮めたり祈つたりする場所でもありましたし、今もそういうことをする所と見られている祈禱の場所が数え切れないほどあります。

これらの恐れは、人間がこの世で、自分にとって都合のいい特別な幸せを求め、魔の誘惑に陥り、魔を恐れざるをえないのです。財産とか健康とか名声とか、そういう自分にとって都合のいいようなものを愛し、逆に貧乏だとか病氣だとか不名誉だとか、そういうものを憎み嫌う、こういう愛と憎しみの心(煩惱)だけでこの世を送ろうとする、そういう人は魔を恐れざるをえないのです。

念仏は無礙の一道であります。それはどんな状況の中でも、その中で阿弥陀仏の大悲の光明に触れ、それによって、与えられた現実の生活の中に落ちつきを見出させていただく道です。「ああなりたい、こ

うなりたい」「ああなつたら困る」「こうなつたら困る」だけの思いで生きるのではなく、そういう思いがどれほど起つても、何時でも今の現実、それがたとえ世間的には不幸といわれるような状況にあつても、そこに「これでよし」と言い得る道をいたただくのです。「来たるものみな善し」と言う言葉がありますが、それが無礙の一道なのです。

こういう道に生きる人は、魔界も外道もその人を妨げて人生を絶望たらしめないし無意味たらしめることは出来ないのです。魔界も外道も、外に幸せを求める人を襲うのです。

「じゃあお前は本當にひどい困窮におちいった時、なお、これで善しといえるか」と自分に問うた時、人に向かつて「はい、いえませぬ」と断言するほどの自信はありませぬ。私のことですから、かなり動転し、落ち込み、もたえるだらうと思ひます。

けれども、また一方でそういう状態にこそ、更なる真実が私に経験され、もっと深く阿弥陀仏の大悲がいたただけるであらうという確かさを強く感じているのです。闇深ければ深いほど、闇を照らす光は強く感じられます。寒ければ寒いほど、太陽の暖かさが身にしみます。人生苦は返つて如来の真実をますます味わわしめるものと確信しています。

かつて、甚だしい苦惱・病苦の人生の中で、大安心と大歡喜をいだかれた長谷川次郎氏の「現在の私には、すべての苦痛は絶対的慈悲の御存在を知らしむる以外に何の作用もいたしませぬ。苦痛が激烈となればなる程、摂理に対する信頼の念を深むるのであります」

「殊に絶え入るばかりの激烈な苦痛が身に迫ります時は、無条件に誹謗や罵言を拜むことができます。真実のところ誹謗も罵言も、亦肉体的苦痛も、すべてが自己の罪業と絶対的慈悲とを知らしめてくれる外に何の作用もいたしませぬ」(「若き求道者の手記」)

「仏陀は更なる難事を示して、ますます佳境(かきよう)に進入せしめたもうがごとし、あに感謝せざるを得んや」というお言葉は、私たちに苦難に対する念仏の救いへの信頼を深めてくださいます。

香樹院徳龍師の言葉

江戸時代の末期、美濃（岐阜県）に赤塚円右衛門と言う人がいた。彼は香樹院師を畢生の師として、師にしたがって、寝食を忘れて聞法した人であった。後に、大病にかかって、京都の伏見街道に家を借りて、臥して念仏していた。ところがだんだん病が重くなってきた。そうやって彼は「今墜ちる、今墜ちる」と声をあげて泣き、その様は実に哀れであった。彼の妹にせき女という人がいて、兄に何度も「こんなものをこのままのお助けじゃ」といつてすすめても、彼は「そんな軽々しいことではなあ」と受けつけなかった。せき女ははなはだ困って香樹院師のところにかがいが、円右衛門の様子を申しあげた。そうしたら香樹院師は「誰が何というても仰せだけは本真（ホンマ）じゃ。今墜ちるものを、そのままのお助けじゃと云え」とひとこと申された。せき女、これを聞いて早速、兄の枕元に行き、香樹院師の言葉を伝えた。病人あきれて「そうかそうか、おれには今初めてのお示しじゃ。初耳じゃ、初耳じゃ」と非常に喜び、嬉し泣きに泣き崩れた。

香樹院師曰く「まことに案じるものはまことに喜ぶ」と。

（染人百話より）

円右衛門は、京都におられた香樹院師の教えを聞くために、故郷の美濃を離れて、伏見に家を借りて、念仏しながら熱心に聞法をされた人である。「後生の一大事」と言葉では聞くが、なかなか私たちは「一大事」にはなれない。とかく聞法も片手間である。稼ぐのも、食べるのも、着るのも、全て仏法を聞いて助かるためであるという程の勢いを円右衛門に感じるのである。

真宗の法は極難信といわれる法である。お助けの法は極めて易いが、これを心に受け入れることは極く難しいのである。その難しさは、数学の難問を解くというような難しさではない。あまりに簡単、あまりに単純すぎて、これを素直に受け取れないのである。

だから、円右衛門は寝食を忘れるほどに聞法に精

を出したのであるが、容易に法をいただけなかったのであろう。

そうこうしているうちに、大病にかかってしまった。もう治る見込みもなくなってきた。円右衛門は未だに信心がいたただけていないことに懊悩したのである。「信心いたただけぬこのままでは、悪道に墮ちる外はない。このままでは死んでいけぬ」と泣き出してしまった。今まで何もかも捨てて、求めに求めてきたが、死に際になってもまだ信心がいたただけぬ。情けないやら悔しいやら恐ろしいやら、円右衛門の心中、察するにあまりがある。

聞法して、信心の花の早く開く人もあるが、長年かかっても開けない人もいるのである。あまりの哀れな姿に妹のせき女が、聞き覚えていた弥陀の仰せを何度も話して聞かせる。「こんな者をこのままのお助けじゃ」と。この言葉は、円右衛門は耳にタコのできるほど聞いてきたのである。そんなことは聞かなくても本人がよく知っている。「そんな軽々しいものではなあ」と、いつものこととして聞くばかり。

困ったせき女が香樹院師の所に相談に行く。そこで香樹院師から聞いた言葉も、実は同じ言葉であった。「今墜ちるものを、そのままのお助けじゃ」と。しかし、「誰が何というても仰せだけは本真（ホンマ）じゃ」との香樹院師の一句。これが痛烈に円右衛門の心に差し込んだのであろう。「助からぬものを、そのままのお助けじゃ」が初めて聞くように響いたのである。それまで繰り返して聞いてきたのであるが、真実には聞いていなかったのである。

「助からぬものを助ける」の仰せの言葉を聞くといつても、この言葉の奥を探るとか、言葉の底にある意味を読みとるとかいうのではない。「助ける、タノメ」の仰せのままが、まさに言葉のまま「本真になる」ことである。「弥陀の本願まことにておわしまさば」という歎異抄第二章の言葉にもそれは表されている。「弥陀の本願まこと」と言わしめているものも信心である。

信心とは、仏の仰せを「本真」と受けとっていることなのである。それまでは仏の言葉を聞いていても、無意識の心の底ではちっとも仏語を信頼していないのである。心の表面では信じていると思っても、心の奥底では実は疑っている。本真と思っていない。いわんや「きつと浄土へ生まれさせる」という仏の

誓いを本当と受け取っていない。だから、いくら「生まれさせるに間違いはないぞ」と、聞いてもさほど喜ぶ心が起こらない。当然である。要するに仏の言葉を軽く聞いているからである。

円右衛門は、死に直面して、もはや我に道無しとなったところで、名師であり恩師である香樹院徳龍師の「誰が何と云っても仰せだけは本真じゃ」という言葉を縁として、「今墜ちるものを、そのままのお助けじゃ」という仏語に全幅の信をおいたのである。仏語を受け入れた時が弥陀と出会う時である。後は、もううれし涙に泣き崩れる外はなかった。人間が本当に泣くのは一回でよい。永劫の初事だから。（了）

【寺院ニュース&雑記帳】



がまづみ

*七月前半は神戸のあるお寺の法務を手伝ったりして、何とかとせわしない日々であったのでいささか疲れた。が、後半は平常の生活に返った。今年にはバツハの生誕二五〇年で七月二八日が彼の命日だから、テレビでも多くの番組が放映され、最近では毎日聴くチャンスに恵まれている。この文章もBS放送でのヨハネ受難曲を聴きながら作っている。バツハは西欧の奇跡である。

*七月二一日、娘が豪州に二ヶ月半ほど行くことになり、無事を祈って見送る。

*七月二九日。松本氏来寺。草庵仏教のこと、信仰と学問の事、生活と聞法など、いろいろ話し合う。

*そろそろお盆のお参りをたのまれる。真宗では他宗と異なり、本来お盆の棚経などはしないのであるが、他宗の影響で盆参りを求められる。習俗的仏教からの脱皮は無理なのだろうか。